

名古屋市

西部地域療育センターだより

No.42

正面壁画「友情」より

令和元年度 西部地域療育センター連続講座（令和元年11月22日）

発達が気になる児童へのかかわり～発達支援と家族支援の現場から～

社会福祉法人あさみどりの会 児童発達支援センターさわらび園 山本 智恵 園長

<要約>

私自身は25年程前に障害児の支援に関わる仕事に就いて、実際に障害をもった子どもたちとの直接支援に関わってきました。多分この西部地域療育センターさんがちょうど25年くらいになられると思うのですが、名古屋市内で初めて地域療育センターができたくらいの時期になります。最初に私が出会った子どもたちは、今はもう30代前半になります。最初は児童指導員として直接障害のある子どもたちと関わる仕事からスタートしたのですが、それをベースにしなが、大学の方で発達心理学を学んでいたこともあって、子どもたちの発達検査等も園の中で実施しながら発達の状況を保護者の方にお伝えしたりする業務にも携わってきました。

さわらび園は、約47年前に名古屋市千種区の地で、その当時は精神薄弱児通園施設という名称で、障害を持った子どもたちが通う場所としてスタートしています。さわらび園は年齢的には2歳から就学前までの乳幼児期の子どもたちが通う療育の場所になるのですが、特徴として親子通園（母子通園）という形態をベースにしています。今も開設当時の形態を一部変えながらですが、基本的には保護者への支援もプログラムの中に入れ込みながら療育をしています。もう一つの特徴としては、子どもたちは学校に上がったり、なかには途中で就園されて保育園

や幼稚園に行かれるお子さんもいらっしゃいますが、さわらび園を卒園をした後のアフターケアを行っています。希望される方は卒園して高校3年生くらいの年齢まで、子どもたちや保護者の相談も含めてアフターケアをしていますので、卒園した子どもたちがどんな経過を辿って学齢期を過ごし、成人期に向かっているのかということを見続けてきています。

私どもの法人の中には成人の障害をもった方の施設も何か所かあります。私自身も1年ほど中村区にあるべにしだの家という障害者支援施設で、入所施設とグループホーム、日中の生活介護事業をやっている場所ですが、そこで成人の方の支援に携わっていた期間もあります。



乳幼児期の子どもたちや家族へのかかわりが主ではありますけれども、その後の学齢期や大人になったときに、幼児期や学齢期の支援がどんなふうにつながっていくのかということも実際に子どもの姿や家族とのかかわりの中からいろいろ感じながらやってきました。今日はそのあたりも少しお話できたらと思っています。

今日お越しの方々は乳児期に関わっている保育士の先生方や、実際に療育に携わっている先生方がほとんどだとお聞きしています。学齢期を含めたこの児童期に関わる支援者の役割ということを考えてときに、私たちが関わっているこの仕事の大きな役割の一つは、やはり子どもの育ちを支えるということだと思います。そしてもう一つは、子どもが育っていくための子育ての部分を支えていくということも、この児童期に関わっていく私たちの役割ではないかと思っています。保育園等でも子育て支援を意識したいろんな取り組みをされている園も増えているかと思いますが、子どもの育ちを支えるお母さんの子育ての部分を支えていくことが今、本当に大切になってきていると感じます。

今日はこのことをベースに、前半は子どもへの発達支援の子どもを育ちを支えるという部分に関しての話をさせていただいて、後半に家族への支援、子どもの育てを支えるという部分の家族支援のことについて話をします。そして、最後にそれぞれの機関のつながる支援について少しふれたいと思っています。

まず、子どもへの支援のお話をする前にお伝えしたいことですが、現在、児童発達支援センター（以下、センター）や児童発達支援事業所（以下、事業所）で事業を行っていく上では、児童発達支援管理責任者という資格が必要になっています。

私自身もその資格を愛知県の研修を受けて持っています。児童発達支援管理責任者の研修は毎年開かれています。10年くらい前から私自身も複数の講師の一人としてその研修に携わっています。その中でお伝えしていることにもなりますが、児童発達支援事業に関わる支援者が押さえておく3つの視点があります。この3つの視点をベースに、この時期の発達支援を行っていくことが大事だと示されています。1つ目は発達支援、2つ目は家族支援、3つ目は地域支援です。

私が長年療育に携わってきている中で、療育の専門性とは何であろうと考えたときに、一つはその子ども自身の発達のラインに合わせて行っていくベースを持つということです。もう一つは子ども自身がそのときの状況で出来ることを見つけながら、子どものことだけではなく家族のかかわりであったり、周りのかかわりを調整していく、こういった視点も療育の専門性の一つではないかと思っています。この調整の部分は対人関係の調整や、環境の調整というのにも入ってきます。

各機関におけるそれぞれの専門性があり、保育の現場や教育の現場の専門性も当然あるかと思っています。保育園や幼稚園においては、子どもたちの年齢に合わせた目的やねらいを基に保育や教育が行われているかと思っています。療育の場面では、少人数でのクラス編成の中で、子ども一人一人の発達の状況に合わせてかかわりというのがとても大切です。その子に合わせたかかわりや実際の支援が行われるということが療育の専門性の中に入ってきます。

児童発達支援事業の中では、個別支援計画という一人一人の子どもへの発達に合った計画を作成することが義務付けられています。そのため、センターや事業所で療育に通っているお子さんに関しては、その子の個別の支援計画というものがあるはずで、それに基づいて定期的に子どもの状況を見直しながら療育を進めていくという形になっています。

さわらび園は定員が30名という小さなセンターになりますが、全部で4クラスあって、7~8名を1クラスとして療育を行っています。7~8名の子どもたちに職員を3名くらい配置してそれぞれの子どもへの状況に合わせて個別的な、丁寧なかかわりを行っています。実際の療育の内容は、それぞれ療育をやっている場所によっても多少違いはあるかと思いますが、基本的なプログラムは共通する部分も多いと思います。

ここからは、さわらび園の療育プログラムの実践の中から子どもへのかかわりについて、お話をしたいと思います。

療育に最初に通う子どもたちにとっては初めての集団の場になりますので、子ども自身の生活リズムを作っていくことが必要になってきます。そのベースをまず作りながら療育していきます。実際の内容としては、遊びを通してのプログラムであったり、

最初は基本的な身辺自立の部分は未経験や未自立の状況のお子さんがほとんどですので、身辺自立の部分も丁寧にしかかわりをもっていくことになります。

例えば、さわらび園に最初にみえるお子さんは、早いお子さんで2歳くらいです。保健センターの1歳半検診後に発達の状況が少し心配だということで、まず週1回の親子でのグループ等につながる方が多いです。まず週1回通うところからスタートして、お子さんの状況によって通園という園児のクラスの方に入園する方が多いです。そうすると週3日から最終的には週5日毎日通うというリズムが作られていくのですが、その中で身辺自立等にも取り組んでいきます。

最初はほとんどのお子さんがおむつや紙パンツでみえます。お家でもトイレトレーニングが出来ていない状況で最初お会いすることが多いです。最初にすることは子ども自身がトイレという場所を知っているか、まずは出ても、出なくてもトイレに誘ってみて、トイレにまず入ってみるといったところからスタートします。トイレに入れたら、便座に座ってみて、座るという体験を定期的に、時間を見ながらしていきます。そのあたりがスムーズに出来るようになってきたら、お母さんと相談して、園内で過ごすときはおむつからパンツに替えるという取り組みを始めます。これは大体どれくらいの時間で排泄がされているかというのが紙パンツだとなかなか分からない場合が多いので、1時間くらいもつようになっているのか、それとも30分くらいで出るのか、子どもの状況を確認するために、お母さんと相談しながらパンツに替える取り組みをスタートさせます。最初は子どもも経験がないので失敗することがほとんどですが、失敗したときに濡れたことの反応がどうなのかも子どもによって様々です。その状況も確認しながら、失敗した後にトイレに行き、トイレに座って着替えるということをしていきます。大体の時間間隔が分かってきたらその子の時間間隔を見ながら、その時間でトイレに誘ってみるということを始めしていきます。そのタイミングでちょうどトイレで出る子もいますし、そうなるまでに時間がかかるお子さんもいます。ただ通う中で少しずつその取り組みを重ねていくと、毎日通い始めたお子さんと1か月～3か月くらい、遅くとも1年以内にはおむつからパンツでトイレで出来るようになっていくお子さんがほとんどです。

また、さわらび園はお母さんも一緒に過ごす親子

での療育の日があるので、お母さんが一緒のときはお母さんに一緒にかかわりを持ってもらいます。お母さん自身もどのように誘うと子どもがトイレに入ってくれるのか、便座に座ってくれるのか、出そうなどのタイミングはいつかということを知っていくと、子どもへのかかわりが少しずつ変わっていきます。そして、園でそういったことが少しずつ出来るようになってくると、それがお家でのかかわりにも少しずつつながります。するとお家でもパンツで過ごす時間を作れたり、お家のトイレでも出来るようになってきたりしてきます。身辺自立の部分は、さわらび園の場合は園で取り組みをまずしながら、少しずつ最終的にはお家へつなげていくという目標を持って進めていっています。

食事等もプロセスとしては一緒ですね。最初は偏食の状況で入ってくるお子さんが8割近くです。食事のことはお母さんにとっては困り感のひとつで、どうしていいのか分からないという状況で来る方がほとんどです。食事の場合もまず、お家ではどんなふうに使っているのか、どんなメニューを使っているのか、使っているときはお家でお母さんがどう関わっているのかという細かなお家での様子をまず聞いていくところから始めていきます。お家での状況やお母さん自身の困り感などを丁寧に確かめ、園での食事のときの本人の様子を観察するというところからスタートしていきます。

最初は5分も席に座ってられないというお子さんが多く、食事の時間席に座って食べることが難しかったり、好きなものだけ食べてその後はすすめても食べようとしないといった状況があります。家での様子がいろいろ分かってくると、子どもが嫌いで食べないというよりもお母さんがあまり出したことがなかったり、子どもが食べないので段々食卓に出さなくなってしまったり本人が食べたことのあるものしか目にしない食事の状況になっているということもあります。

食事は1日3回あるので、園の取り組みだけで進めていくことは難しい部分があります。まずお家では、本人が食べても食べなくても家族と同じものを出してみるということもお母さんと相談しながら進めていきます。

また、さわらび園では年間でお泊り保育の機会が2回ぐらいあり、お泊り保育のときは続けて食事の様子も見られますので、たくさん遊んでおなかが空

いたら少し自分で食べるという子もいたり、子ども自身がどう食の経験を広げていくきっかけを作っていくかということも見ていきます。

食べられるものが増えてきたり、座って食事に向かう時間が少しずつ長くなってきたりして、親子療育の日にお母さん自身がそういった子どもの姿を目にすると、この子は嫌いで食べないのじゃなくて、食べたことがなくて食べられなかったんだとお母さん自身に気づきが出てきます。そうすると、園の給食で食べたものをお家で少し出してみたりする取り組みが始まります。

特に身辺面のことは、お家と連携を取りながらお母さん自身の思いを聞きながら進めていくということが大きなポイントです。

子どもたちのことを知っていくうえで、子どもの発達の状況を知るということはとても大切ですが、そのためには定型の子どもたちの発達のプロセスを知っているということがすごく大事になってきます。さわらび園の職員も定型の子たちの発達のプロセスの勉強をしています。そのうえで、今の子どもの発達の状況はどうかということ把握していきます。

発達状況というと発達検査や知能検査の結果と思われる先生方も多いと思いますが、確かに知能検査の結果というのは子どもの発達評価をしていくうえで一つの大きな材料になってくると思います。知能検査の結果を見て、子どもが今どんな発達状況にいるのかということを知っていくのですが、知能検査は検査室という個別の場面で他の刺激が少ない状況なので、子どもによっては比較的分かりやすい環境設定がされている中で行います。そのため、集団場面の中で見せる子どもの姿と結構ギャップがあるお子さんもいますので、集団の中でのその子の状況、困り感や理解の仕方も併せて発達状況を把握していくことが大事です。

なぜ発達を知ることが大事かというところで、定型発達のお子さんのお母さんの方から積極的に周りに働きかけたり、周りのことを真似したり、自分で吸収していく力というのが年齢と共についていくお子さんがほとんどかと思いますが、ハンディキャップのあるお子さんの場合、自然に学んでいくということがなかなか難しいお子さんが多いかと思えます。そのため、こちらが適切に本人に分かるように対応していくということがポイントになるの

で、その子の発達を知って、その子に分かりやすいかわりを見つけていくということが必要なことだと感じます。

特に発達障害のお子さん、自閉症スペクトラムの診断を受けているお子さんですと発達のアンバランスさがあったりします。発達検査では、例えばDQが60~70あるお子さんでも発達の中身を見ていくと全てがその力があるわけではなくて、分かっている部分と落ち込んでいる部分があるというお子さんも多いかと思えます。そのため、発達検査も数字だけではなくて、中身を確認したり知ることが出来ると、お子さんのことを細かく知ることにつながっていくと思えます。

また、その子の得意なこと、そして苦手なことを知っていくということも、お子さんと関わるうえでは重要です。得意なことは出来るだけそれを活かしていく工夫を考えられるといいと思えます。例えば、耳で聞いただけだと入りにくいお子さんでも実物を見せたり写真を見せたり視覚的な提示で補助をしてあげると注目がしやすいお子さんもいます。本人が得意なことを知っておくと本人のかかわりに活かしていくこともしやすいです。そういった意味で、障害特性を知っていくことも発達を知るということと併せて大事なことになってくると思えます。障害特性の部分は、例えば自閉症のお子さんの特徴はこういうことが特徴としてみられますよとか一般的に言われていたりしますが、更にそこから少し踏み込んでその子自身はどうか、同じ自閉症の診断をうけているお子さんでも、その子の得意不得意や特性の部分も含めて違いがあるかと思えますので、本人自身の障害特性の理解というのが大事になってくるかなと思えます。

他には遊び方を観察していると、発達の子どもの状況がみえてくると思えます。例えばミニカーを並べたり、何かを眺めたり、絵本を見るよりもめくるということが楽しみのお子さんの場合、感覚的な遊びの段階にいるのだなと分かったりします。同じミニカーでも、実際にそれを走らせて遊んだりだとか、例えば何かと組み合わせせてその上を走らせたりというような動きが出てきているお子さんの場合は見立てる力が少しずつついてきているなと見ることも出来ると思えます。

また、実際に子どもと関わる時に大事になってくることとして、まずその子を知って関係を

つくっていくということが第一歩になっていくと思うのですが、まず、大人との関係がどれくらいとれるか見ていくことが必要かと思います。友達同士で、おもちゃの取り合いだったり、友達が使っているところに入っていくときに、相手の状況が見えていなくてトラブルになったりと、子ども同士の集団では起こったりすると思います。そうしたときには大人が媒介になって他の子との関係をつないでいくということが必要になってきます。しかし、仲介をしている大人に注目出来ないと仲介はうまくいきません。そのため、大人との関係がどれくらいとれるようになっていくのかということも見ながら、集団の中での他の子との関係調整につなげていきます。

スモールステップで関わるということも大事だと思います。今の子どもの状況でやれること、やれそうなことは何かということを見極めていくことです。すぐには難しいことは、どういうステップを踏めば出来るようになっていくのかと、それを細分化して、まず、小さな階段を昇っていくというスモールステップに変えながらかわりを持っていくということが必要かと思います。

また集団生活をおくるうえでは、子ども自身が次の行動の見通しを持っていくということが大きな安心感につながっていきます。何が起こるかが分からない状況では不安になったり、パニックになったりというお子さんもいるかと思います。決まった流れで、決まった手順で進んでいくということで見通しが子どもの中に少しずつ持てるようになっていきますので、さわらび園の場合も新年度の特に最初は、生活の流れは変えずに同じことを出来るだけ繰り返し、子ども自身がまず安心出来る空間や環境を作っていくところからスタートしていきます。少しずつ見通しがついてきたなと感じたら、プログラムに少し変化を加えたりして、生活全体を見たときに子ども自身が見通しをつけながら次に進んでいけるような環境調整も出来るといいかなというふうに思います。

最後に、できれば最終的に成功体験にしてあげることが大事です。うまくいかなかった、やれなかったという状況で終わってしまうと、それが学習になっていってしまう場合があります。難しいことですが、最終的には少し子どもがやれたなとか、こういうふうにやればいいんだなと子ども自身が感じられるようなかわりを工夫していけるといいなと思います。

みなさん、普段子どもと関わってみえる中で、集団行動になじめなかったり、癇癪が強かったり、場面が切り替えられなかったりといった、子どもたちの気になる行動はありませんか？ そういった子どもの行動の背景にあるものが何だろうかを見ていったときに、集団行動がとれないというお子さんの場合、そもそも言われていることがよく分からなくてそうなっているのか、周りの状況が見えていなくてそうなっているのか、興味や関心が持てなくて参加しないのか、まだ長い時間集中することが難しいので、最初は注目しているけれども、その後集団から外れてしまうという状況にあるのか…、中身を見ていくと、今の子どもの状況というのが見えてくるかと思います。

さわらび園では、保育所等訪問支援事業という国の事業を平成25年から行っています。この事業では、保育園や幼稚園に訪問支援員が実際に行ってその子の観察をしたり実際に直接支援をしたりしています。

訪問先の保育園で、「全体活動になると必ず部屋を出て行っちゃう子がいて、どう関わればその子のためになるのか？」というお話が保育士さんからありました。

訪問支援員がその子の様子を客観的に観察していると、本人はやることがよく分からない、全体活動が始まるまで待つ時間があつたりすると何時まで待てばいいのかが分からない、何が始まるのかが分からなくて、その場にいることが難しいんじゃないだろうかという仮説や見立てが出来てきました。そのことを保育士さんに話をしたら保育士さんも思い当たる部分があったようで、「そうかもしれません、待つ時間があまり無くて、本人がやることがわかるときは全体活動でも少しの時間で出て行っちゃうことはないの…」という話になって、全体活動が始まるまでの時間に本人の関心のあるものを少し取り入れてもらったんですね。そしたら、最終的には部屋を出ていっちゃったんですが、少しその場で過ごすことが出来て、出ていくまでの時間が長かったです。

なぜそこに子どもがいられないのかということが見えてくると、どんな工夫が出来そうなのかとか、先生の人数や体制にもよると思うのですがどんな工夫が可能なのかということを見つけられるかなと思います。

他には、やってほしくないことをやってしまうお

子さんには、「やっちゃダメだよ」って止めるかわりが多くなりますよね。ただその後には必ずどうしたらいいのかということも併せて子どもに伝えてあげることが大事だと思います。この間の訪問支援の話なのですが、園庭で遊んでいるときに、石を口に入れちゃう子がいたんですね。「食べちゃダメだよ」と保育士さんが声をかけたら、その子は石を口に入れたんです。保育士さんは本人が石を手を持っていたので、「食べちゃダメだよ」と言ったら、口に入れたと。どう関わるとよかったのだろうかかと振り返りをしていて、もしかしたら、“食べる”という言葉に反応していたのかもしれない、“ダメだよ”ってことが伝えたかったけど、「食べちゃダメだよ」の“食べる”という言葉が先に入ったのかもしれないので、石を持った時に「ここに置こうかと伝えたらどうでしょうね」という話をして、次の同じような場面で、保育士さんがそのようにその子に言ったら、その子は石を置いてくれたそうです。

どうするといいいのか、どう伝えていくと分かりやすいのかということをお子さんの理解の状況を見ながら探っていくことが大事なかなと思います。

そして、一方的でないやりとりを大切にしたいと思います。子どもからの反応が最初はなかなか返ってこないことも多いと思いますが、こちらが伝えたことがどのように伝わったのかということを見ていく、子どもからははっきりした反応が無かったけれども、こちらの方をチラッと見る姿があったとか、こちらが伝えたことがどう相手に届いているのかということを見ながらかかわりを持っていくということが大切だと思います。

日常生活や遊びを通しての部分で、みなさんもやっていることだと思いますが、子ども自身に大人と一緒に何かをすることが楽しいと感じてもらうこと。その次の段階として何かに取り組むと褒められたり、認めってもらったりそれが嬉しいというふうに感じられること。そういったことが、次の学齢期になって集団の中で過ごしていくことや学習や課題に取り組むということにつながっていくと思います。幼児期は学齢期につなぐその前のベースの部分を作っている時期ですので、そういった体験を幼児期にどれだけ子どもたちが重ねられるか、そのためにどんな工夫が出来るかということを考えていけるといいかなと思います。

園の研修会でお母さんにもお伝えしていますが、お子さんに障害があるということで子どもたち自身は分かりにくさや困り感を持って過ごしています。

適切なかかわりを受けることができないと、それが二次障害のかたちとなって更に子どもに負荷がかかってきます。そういったことがどんどん積み重なっていくと、人間関係も上手くとれなくなって子ども自身の本来の姿がはっきりと見えにくくなっていく、こんな状況が起きていく可能性があると思います。そのため療育の中で大事にしているのは、子ども自身の障害自体を無くすことは出来ないけれど、周りの環境であったり、本人自身に適切に関われるかということの中で、子ども自身が出来るだけその子らしさを大事にしながら生活できるように、そんな環境調整とかかわりの調整が出来たらと思っています。

幼児期に身につけておきたいことについては、今までお話した中で重なりますので細かくお伝えませんが、自己肯定感を持つとか自己理解の部分は、学齢期の課題にもなってくるかと思っています。自分自身が認められたという体験がきちんと子どもの中に重なっているかということ、そして自分自身の得意なことや苦手なことを本人自身が少しずつ理解できているということが、特に学齢期以降、大人になってからの生活の部分に大きく関わってくると感じます。幼児期に関わっている私たちはどうしても基本的に幼児期の子どもたちへのかかわりをベースに考えていきますが、この先、子どもたちがどんな育ちをしていくのか、どんなことが発達課題になってくるのかという少し先のことも視野に入れながら、今何が出来るのかということを考えていけるといいと思います。ライフステージを通して発達を支援していくということが子どもたちの人生を考えていく上では、とても大事になってきます。

このあと保護者への支援の部分を少しお話ししようと思いますけれども、今日は私自身が出会ってきたお母さんの姿をお伝えしようと思います。

お母さん自身がどんな心のプロセスを辿って、子どもを育てていくのか、子どもに障害があるということを受け止めていくのかということに少しふれたいと思います。

さわらび園では、卒園するときにお母さんに文章を書いてもらうのですが、その文章からお母さんたちの言葉をひろって子どもの障害が分かってから子

どもと歩む中でお母さん自身が感じてきたことを10分くらいのスライドにまとめましたので、今からそれを見ていただけたらと思います。

～スライド上映～

今、見ていただいたのが、さわらび園に通った何人かのお母さん方が卒園のときに書かれた文章からの言葉です。最後に、『我が子へ』というメッセージを書かれたお母さんは、今はお子さんが中学校3年生になりました。次の進路に向けて今またお子さんと一緒に歩んでいるところです。お母さんたちの抱えているいろんな思い、どんなプロセスを辿って子どもを障害のことも含めて受け入れていくのか、なかなか受け入れられない気持ちを持ちながらどう歩いていくのかというお母さんの心のプロセスを少し感じとっていただけたらと思います。

保護者支援では、保護者から発信されるニーズと支援者がこういうことが出来るといいんじゃないかということがずれているということがよくあると思います。そうしたときこそ、子ども自身の状況をまずしっかりと見極め、お母さんの思いを聞いたうえで、お母さんの願いに至るまでには、どんなステップを踏めばいいのかということを手際よく紐解きながら、お母さんと共有しながら、そのためにまず何かをやるかという話をしていけるといいと思います。

保護者の思いを聴く、受け止めるのがお母さんとの関係を築いていく第一歩になると思います。お母さん自身がお子さんのことをどう知っていけるか、保護者の気づきが実際の子どものかかわりにつながっていきますから、その部分をどう私たちが支えられるかというところが、保護者をサポートしていくうえでとても大事になってくると思います。家族自身が本来持っている姿を引き出して子どものかかわりにつなげていけるといいなと思います。今日は時間がないのでふれることはしませんが、お母さん以外の家族、お父さんであったり、おじいちゃん、おばあちゃんの理解がどれくらいあるのか、お母さんを支える体制がとれているご家族なのかということも併せて見ていくことが必要です。やはり、そこを支えていく環境がないとお母さん自身が一人で子どものことを担っていくというのはかなり大変なので、協力がとれている家族なのか、そんな情報もお母さんと話をしながら把握するといいかと思います。あとは、障害のある子以外のきょうだいの子への支援であったり、サポートという部分も今少しず

つ、視点が向けられるようになってきていますが、これも大事な部分だと思います。

最後に、つながる支援についてですが、ライフステージを見通した支援ということで、特にこの幼児期に関わる私たちは必ず次の機関に子どもを送り出すこととなります。その移行期をどうつないでいくかという移行支援の部分がすごく大事です。例えば、療育の園から保育園・幼稚園や学校へ、また保育園・幼稚園から学校へという移行期の部分で次の機関にお子さんのことやご家族のことをどうつないでボタンタッチしていくのかということも子どものライフステージをつないでいくうえでは大事な部分です。縦と横のネットワークというところです。子どもの年齢に従って次の段階へ、幼児期から学齢期、そして成人期へというその縦の部分の機関をつないでいくということも重要ですし、同じ時期に関わっている機関同士が子どもや家族のことを一緒に考え合うことも必要です。そういう意味では、今日のように西部地域療育センターさんの連続講座に地域の保育園の先生方が足を運んでいることであったり、一緒に考え合う場を地域の中で作っているということも、長く続けられている素晴らしい取り組みだなと思います。

そして、お母さん同士もつながっていく力を持っているのか、例えばお母さんが相談する場所とつながりをもつというのも大事ですが、お母さん同士の横のつながりがどれくらい持っているのかということも、この先お母さんの大きな力になったりします。お母さん同士が知り合ったり、つながっていくということも子どもたちの育ちを支えていくうえでは大きなポイントになる部分かと思います。

まず子どもへの発達支援のベースがあって、それをご家族とどう共有していくかということが私たちの仕事の大きな役割になってきます。私もそこに携わる一人としてこの先も地域の中で子どもやご家族と出会っていきたくと思っていますし、今日こういう機会をいただきましたが、他機関の先生方とつながりも大事にしながら子どもたちや家族の支援に引き続き携わっていけたらと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

※令和元年11月22日に行われた名古屋市西部地域療育センター連続講座でお話した内容を一部修正加筆して、まとめたものです。